令和７年度　第１回　静岡市総合教育会議　会議録
（委員等の発言の要点を箇条書きでまとめています）

日時：令和7年8月 29 日（金）
10 時 00 分～12 時 00 分
場所：静岡市役所静岡庁舎
新館8階　市長公室

１　開会

【難波市長挨拶】
・今年度の総合教育会議では、不登校児童生徒と幼保小接続の 2 つのテーマについて協議する。
・総合教育会議を市長部局である総合政策局が積極的に関わる形で始めて、昨年は教育大綱を作り、その中で教育委員会と市長部局の関係が非常に深まり、総合的な教育に関する議論が出来るようになった。
・今年度の不登校児童生徒と幼保小接続に関しても、教育委員会だけでは出来ない問題であり、家庭の問題や医療の問題など様々な連携も必要になってくる。
・不登校の問題については、全国の傾向と同じく静岡市も特に近年増加率が非常に高くなっている。要因は様々なことが考えられるが、増加しているから対処療法的なやり方ではなく、なぜ増えているのかという根底の理由を考え、増加を止めることが重要になる。幼保小の接続については、小学校一年生の壁などとも言われており、その後の不登校にも関係する可能性がある為、議論が必要である。
・現在、学校教育も変化してきているが、教室に入って正面を向いて勉強するというのは昔から変わらない状況。家庭の中での過ごし方や社会環境が変わっている中での問題を捉えた上で、学校教育の問題、幼保小接続の問題を考えていくことが重要。
・4 月に新たに就任された中村教育長のもと、活発な議論をしていきたい。

【中村教育長挨拶】
・現在、社会や人々の様々な価値観などが変化しており、それに伴って教育の環境も大きく変化している。
・本日のテーマである不登校児童生徒、そして幼保小接続の問題についても、こども一人一人の成長、そして学びの基盤を整えるために、極めて重要な課題である。
・この二つのテーマは非常に密接につながっており、一人のこどもから見れば、幼保小、そして小中の垣根がなく、一つの連続した学びである必要がある。こども達が変わるのではなく、大人側が変わっていく姿勢が大事である。
・教育委員会としても、これまで教育現場やこども、保護者の声を聞きながら、様々な取組みを進めているが、残念ながら小中における不登校児童の生徒数は増え続けている。幼保小接続の問題も根底にあると思われるが、小学校一年生の不登校児童が増加しているのも危惧している。
・本日の会議では、現在の課題や問題に対して掘り下げて議論することで、現状を正確に把握し、問題の本質がどこにあるのかを考え、難波市長をはじめ、市長部局、教育委員会の皆様と一緒に、実効性のある方向性を見出したい。

２　議題

テーマ１：不登校児童生徒の現状と課題

【説明】
（学校教育課長）
・別紙１、別冊資料により、現状や不登校が与える影響、各学校での対応、現在の取組と課題、協議の視点について説明

【意見交換】
（井上委員）
・教育機会確保法の説明もあったが、不登校を考えた時に、別冊資料８，９ページの説明にある児童生徒の状況において、こども達の学びをどう保証して、多様な選択肢を作るのかが重要だと感じた。別冊資料８，９ページで「登校はできるが在籍学級で過ごせない」子が、小学校 1200 人、中学校 1000 人となっているが、予防支援・未然防止の観点で校内サポートルームが必要と考える。校内サポートルームは小学校 22 校、中学校 35 校となっているが、その他の学校はどうなっているのか。また、場所を作ればいいだけでなく、そこに誰がいて、どんな空間で安心安全にこども達の居場所になるのかということが重要。
・教育相談員の勤務は週 1 から週 4 であり、常勤ではないが、不在の時間は他の先生方が対応していると思う。教育相談員が配置されている学校では、児童生徒の相談にのったり、学習に寄り添ったり、教室には行けないが、学校に来ているこども達の第 3 の居場所になって登校に繋がり、先ほどの 1200 人や 1000 人の内の一定数にあるのではないかと考える。
・令和 7 年度の全国学力学習状況調査の結果から、困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますかという質問に対して、肯定的な回答をした静岡市の児童生徒の割合は全国平均を下回っている。小学校では、全国 70.6%に対して静岡市 64.4%で差が 6.2%。中学校では全国 73.2%に対して静岡市 68.4%で差が 4.8%ということで、こども達が安心安全に相談できる、先生かもしれないし、校内サポートルームにいる教育相談員かもしれないし、スクールソーシャルワーカーかもしれないけれど、安心安全に自分が信頼できる大人に相談できる体制を構築していきたいとデータを見ながら感じた。
・他県の事例では、名古屋市教育委員会は、全国で初めて全市立中学校 110 校にスクールカウンセラーを常駐配置して、スクールソーシャルワーカーとスクールポリスという存在があるらしく、チームでこどもを見守る体制を構築しているというような話を聞いた。
・来年度以降、不登校の未然防止・予防支援という観点で、サポートルームが現状 57 校ということだが、全校配置、常駐で教育相談員がいるような体制を静岡市が作ることができたら、こどもたちの状況は変わっていくのではないかと感じる。
・来年度から静岡市でスタートする学びの多様化学校が目指している学校というのがこれからの新しい時代の学校像そのものかなという風に感じる。通常の授業をこども達が楽しみながら取り組んで、こども達が学校に行きたいと思えるような、そんな授業に変えていくということが大前提としてまず必要なのではないかと感じた。

（難波市長）
・今の点について、深掘りするか、または意見を色々言っていただいて包括的にやるかどちらかかと思うが、何か指摘しておきたいというのがあれば。

（佐野委員）
・校内サポートルームは教育相談員がいないと成り立たないところがあることで、そこは必ず必要になってくる。
・訪問教育相談員に関して、令和３年でしたか、訪問相談員が伺うことによって 70%は不登校に効果があったという統計が評価にあった。だから訪問教育相談員の拡充をぜひ検討いただきたい。6 人を 12 人に倍増したりとか、すごく力を入れてやっていた。訪問教育相談員もアウトリーチ型のアプローチとして強化していただきたい。
・マンパワーで解決する部分が非常に多いかなという中で、この不登校自体のハードルが低くなってきているというのも一つの要因で、本来はやっぱり学校に行ってみんなと一緒に学んだ方が良いということは前提の中で、そこからどうしても無理な子はこういった方法があるということを前提に置いておかないと、保護者の方も苦労されている部分が非常に多いなと思う。前提に置いておきながら、不登校のこどもを増やさないためにはどうしたらいいかということで、担任の先生だとか一部の先生に偏りすぎているのではないかと感

じる。
・どうやって不登校を減らしていくかというのは、社会全体で考えていかなければいけない中で、学校も保護者も、不登校に対しての認識を広げていく必要があると感じる。その中で、支援が担任等の個人の先生とか、チームで対応することになってると思うが、マニュアルやガイドラインの様なものがこれから必要になっていくと考える不登校の理由は一人一人様々なので体系化するのは難しいが、アプローチの仕方であるとか、どうやって支援していくかということを、もう少し体系化していくことが重要である。

（難波市長）
・整理してみると、別冊資料８ページの、今お話いただいた小学生のところで、校内サポートルーム利用者 1200 人。「登校できるが在籍学級で過ごせない」も 1200 人。そこと一致している。
・それに対して右に行くとサポートルームの支援が少ない。今度は相談体制の下のところに訪問教育相談員がいるが、どのくらい不登校の人にアプローチができているかというと、学びの場のサポート部分で 1200 人いるが、そこに行かない不登校児童数はおよそ 700 人となっている。学びの場が提供できているのかというと、教育支援センター5 人、フリースクール等 70 人となっており、学びの場はほとんど提供できてない。おそらく家庭内での学びが想定されるが、それに対して訪問教育相談員がどの程度アプローチが出来ていて、この訪問教育相談員が、家庭のところにアプローチをすることで、校内サポートルームのところにどのくらい持っていけるのかが一つのポイントなのかもしれない。
・この校内サポートルームに注目すると、校内サポートルームでサポートしていた人がそこでしっかり学べるのか、それともまた在籍学級に戻れるのかもポイントになる。校内サポートルームにいる人が校内サポートルームにも行けない状態になることを防ぐというのもポイントだと考える。全体とすると、そのあたりが大きなポイントかなというようなご指摘ではないかなと感じた。
・今の点について、他の問題にあまり広げないで他にご意見いかがか。

（黒川委員）
・今の話にあった登校できるけれども、在籍学級で過ごせないこどもの支援というのは、徐々に厚くなってきている印象。
・校内サポートルームに関しては、全校配置していくという方針で教育委員会としても動かれていると思うが、なかなか校内サポートルームを利用するこどもの数に応じての人員配置が課題になるので、小規模校といったところでは支援が手薄になっている印象。各学校がどれだけそういったこども達がそういった場を必要としているのかというのを各校から意見を吸い上げて、教育委員会としてそういった場所の確保、また人の確保というの早急に検討していくことが必要だと考える。
・在籍学級で生活しているこどもの中にも、調査の中で学習面、行動面で著しく困難を示すとされた児童数は、約９%くらいと言われていますが、そういったこどもに対する支援が非常に重要かと感じる。
・教育相談員が各学校、特別支援学級に所属するこどもや特別な支援を必要とするこどもの数に応じて配置されていると思うが、必ずしもそこに囚われずに、各学校、各教室の中で困っているこどもにどんな支援がもっとできるのかっていうことを考えていかなければいけないと感じる。
・実際に、学校の中で困難を抱えて SOS を発信しているこどもはいると思うが、そのこどもをどの様にサポートできるかによって、校内サポートルームに通学先を変えていくこども、学校から別のところへいくこどもが増えていくので、通常学級の中で何が必要とされているのかということの精査が非常に重要。
・もう一点、学校の中でこどもが抱えている問題が非常に複雑化している。特別支援を必要としているこどもの数も非常に増加しており、こどもの困窮、シングルの家庭など保護者

の困窮も増加している。ヤングケアラーの問題もあったり、学校だけで解決できないというのが課題のところにもあったが、今まで学校というのはその教育としての役割を重視する中で、他機関との連携っていうのは非常に難しい場所ではあると感じる。
・特別支援学級など、支援を必要としているこどもの中には障害福祉に関わるサービスを受けているこどもも多数おり、虐待やネグレクトなど、生活困窮というところで、社会福祉事務所と関わっているケースも多々ある。そういった生活基盤がしっかりしていなければ、学校生活を安定的に送ることは難しいので、学校だけでなく他の部局と協力しながら解決していくことが重要だと感じる。

（難波市長）
・指摘のとおり、別冊資料８ページは、教育委員会が今やっていることになる。家庭に問題があるとすれば、そこにどうアプローチしていくかが本日の議論していくところになる。教育委員会に本日の資料を出してもらったため、家庭の部分で市長部局が何ができているのかというところは記載がないので、次回の会議では、家庭へのアプローチがどういう形になるのか、家庭の困窮の問題、ヤングケアラーの問題も含めて確認していきたい。

（永松委員）
・自分自身も 2017 年から 2019 年まで小学校４年から中学１年の途中まで自分のこどもが不登校児だった。きっかけは、主人が亡くなったことだったが、そこに何が一番足りなかったのかと考えると、こどもに対してレジリエンスのようなサポートをしてあげられなかったことだ反省している。
・現在の保護者世代が、ゆとり教育世代が多くなっていると思うが、ゆとり教育で生きる力を育むという施策だったため、伸ばせるところを伸ばすというところが良かった。ただ、保護者の学校に対する意識の変化なのか簡単に休ませてもいいといった形で置き換わってしまっている懸念もある。
・私自身の経験から、いろいろなところに相談に行き、担任の先生にすごく助けてもらった。
・なかなか解決はできなかったところ、最後は同じクラスの友達が迎えに来てくれたら、保健室に行けるようになった。次に保健室に他の友達が給食を持ってきてくれて、それが１人から２人３人になり、じゃあ一緒に片付けに行こうよって誘ってくれて教室に入れるようになった。大人のサポートもすごく大事だが、こどもの社会の中で上手く手助けしてあげることが、大人ができることでもあり、そのアプローチも重要だと感じる。

（松村委員）
・行政として、総論としてこういう風になった方がいいんじゃないかっていうことを、データを元にして意見が出てくる。
・このデータとしては今日頂いたものよく調べたなって思う。でももう一つは、不登校だったこどもが大人になった時に、いつ・どれだけ社会に戻れているかを示すデータってのは調べようがないじゃないですかね。でもそれは大切なことなんじゃないかなと思っている。
・自分が教員だったから、生徒個人に対してどういう態度でどういう姿勢で向かい合うのかっていうことは、教育の一番根本だってことは揺るがない気持ち。学校というのは勉強を教えることも大切なんだけど、実はそれ以上にミニ社会である学校での生徒の過ごし方っていうことも、やっぱり教えなきゃいけないと思うし、もう一つは各々事情があるこども達に対して寄り添う姿勢が教員にあるかないかで、かなり違ってくる。要は慈愛の心があるかって難しい話になるが、要は人間本来の優しさの気持ちを持って、子どもたちに接していく。それからもう一つは今世の中の風潮として学校に対して親が家庭訪問を受け付けないだとかという事例も出ている。
・例えば大谷翔平選手の試合を観ると、行動がすごく教育的だなと感じる。ひまわりの種を食べて、他の選手は多くが地面に捨てているが、彼は紙コップの中に捨てていて、それを

真似する選手も出てきている。ただこないだあるアナウンサーが言ってたんだけど、大谷選手の姿勢を真似するようになると良いという反面、あの場所を掃除する仕事を奪っちゃう、散らかさないと掃除をする人の仕事がなくなっちゃうっていう意見があるって。まあそれがアメリカでは当たり前なんですよね。でも掃除する仕事がなくなるという以前に、散らかさないという公衆道徳をみんなが持つべき。これは日本人の良さだと思う。だから、そういうことを学校で、小さい頃から教えるって大切な要素だと思う。だから今、不登校のこどもをどうするかっていうのは、愛情を持って接するマンパワーしかない。組織としてどう対処するかという点だけでなく、従事する人間に優しさがあったり、慈愛の気持ちがなければいけない。もう一つは、同じことを喋っても各々の捉え方が全く変わっちゃうことが往々にしてある。違う感覚でしか捉えないっていうことをわかっていて、接しなきゃいけない。人間的な要素を持った人がこどもに接しなければ効果は出ないと思う。そこで行政として取り組む事というのは、生涯にわたっての教育に繋がっていく。
・こどもに対して若い時に接したことは、年々経験を積むことによって、人間的に成長していく為、各々が優しさを持って接するということを実践していけば、何か花は咲くんじゃないかと思う。行政という立場ではこうあるべきだっていう話は当然出てきて当たり前で、その中で我々はどういう動きをしなきゃいけないかっていう総論と各論をちゃんと分けて考えなければダメだと思う。

（難波市長）
・今日は結論を出す時ではないので、皆さんからいろんなご意見をいただいたということですが、教育長から何かお話があればお願いします。

（中村教育長）
・今ある現状の課題がどういったところに本質的なものがあるのかということを改めて考える機会になっている。
・永松委員から話があったが、自分も様々な保護者から話を聞く機会があり、その際に言われたのが学校の先生方っていうのは最後の最後までとことんこども達や保護者の話を聞く姿勢があるようで、実はないのではないか。そこに、違和感というか、本当にわかってもらえているんだろうか、わかろうとする気持ちで話を聞いてくれているんだろうかというところで疑問を持つというようなご意見をいただいた。私も教員でしたので不登校のこども達や保護者と話をする機会がたくさんあった。自分の反省でもあるが、何かこう答えを用意して話を聞くっていうのが、多くの先生方なのではないかなと思う。そこを変えていかなければいけない。答えを用意しながら聞いてしまうと、自然にそっちに誘導してしまうというようなことが起きるのではないかなと感じる。
・4 月から学びの改革ということで、不登校の未然防止、通常学級の中でこどもたちが困ってしまったらどういう支援ができるのか、その前にこどもたちはなぜ困ってしまうんだろうかっていうところを大切にしてきた。そこをしっかりと受け止めて、なぜ困るのだろうという点を考えて、困ってしまう環境が学校側にあるのであれば、そこを変えていかなければいけない。
・これまでのような画一的な教育の授業のやり方ではなくて、子ども一人一人は違うんだと、学び方も違うし、学ぶペースも違う、理解力は当然もっと違うということを前提にして学びに入っていく必要がある。今そういった取組みに向けて、教育委員会、そして現場の先生方と一緒に、取り組んでいる最中。そうしていくことで、こども達が本当に学校に行くのが楽しいと思ってくれるような環境を作っていきたい。こども達は一人一人自分で学んでいける力を持っていると思うので、言い方は悪いが、先生がレールに乗っけてこっちへ行くよって旗を振らなくても環境がしっかり整えば自分で学び始めることができる。自分で選べる、自分で決められる教育がいかにこども達に楽しいと思ってもらえるのかという点で教育環境を整えていきたい。

（難波市長）
・ここからは次の幼保小接続について聞きたい。最後にまた、幼保小接続と不登校両方のテーマでもご意見をいただきたいと思っている。それでは、資料の説明をお願いします。

テーマ２：幼保小接続の現状と課題

【説明】
（幼児教育・保育支援課長）
・別紙２により、現状や課題、協議の視点について説明

（難波市長）
・今回もご自由にご発言いただきたい。

（井上委員）
・行政の縦割りというか、市長部局の動きがあってという話を聞いたが、教育と福祉、あるいはこども未来局が連動して取り組んでいく重要性を感じた。教育と福祉の連携、教福連携というところが重要だと思うが、個人情報の兼ね合いや引継ぎをどのようにするのかという課題もあり、現状必要な情報がきちんと幼小というところで届いていないという課題もある。
・例えば福祉上でこどもに関する伝わるべき情報が伝わっていないというような課題。過去に、私が関わった事例の中で、福祉から教育側という課題だったが、３月頃に小学校入学を控えたお子さんが、たまたまこのタイミングでご両親が住所不定になった。その情報は福祉部局は把握しているが、生活保護の申請に受給申請から２週間位かかるということで、３月ギリギリのタイミングで小学校に入るお子さんは住所が決まってないので、どこの学校に入学するか決まらないような状況が過去にあった。
・福祉と教育でワンストップというか、組織横断的な情報交換ができる組織があることによって、そういった問題は解消されるのではないかと感じた。こども達は学校、教育現場に来ているので、こどもなので自分自身がなにか困ってるよというのをこども自身も認識していないことがある。自分のことをヤングケアラーだと認識していないなど。こども達はSOS を出しづらい。その状況を学校側は把握するけれど、そこを福祉に繋げられないという課題が、今回の内容に繋がっていると感じた。
・例えばヤングケアラーのワンストップ窓口を神戸市が設置してますみたいな話も聞くが、ワンストップと言っても、そう簡単に実現できることではないと感じる。他の市長部局が市民の情報を個人情報の課題もあると思うが、この幼保小に関する情報も含めて、スムーズに連携できるような体制が、今以上に何か良い案があるといいと感じた。

（佐野委員）
・幼保小の連携で一つの視点として、地域との関わりがあるのかなと感じる。質問になってしまうが、今から 10 年ぐらい前に地域に開かれた幼稚園づくり推進事業ってあったが、幼稚園とか保育園が地域とどういう関わりがあるのか聞きたい。

（こども未来局）
・お話に出ました、地域に開かれた幼稚園については、現在もやっている。こども園、保育園等も地域へ開けてるというか、皆さんどうぞというようにしており、地域の皆さんへ発信していることもやっており、密接に地域と関わっているという風に私どもは思っている。

（佐野委員）
・幼稚園で子育て広場というものがあって、そこで問題を抱えている保護者の方たちも、意見を言うことができたり、それが医療福祉センターや憩いの家とか、色々なところと関わるパイプになっているのかなと思う。縦と横の繋がりと言いますか、地域の方にどうやっ

て関わっていただくか、地域イコール保護者といったこともある。そういう視点も考えた方がいいのかなと感じる。
・以前から小学校に幼稚園保育園の先生が伺ったり、その逆をやったりという交流であるとか、認識を深めていくことはしてきたと思うが、先程、フェーズ２とかフェーズ３とあり、フェーズ３の「架け橋期のカリキュラム」を幼稚園、こども園の先生たちと小学校と一緒に作っていく段階に来てるのではないかと思う。十年来ずっと交流を重ねてきていることは、非常に成果が出てきていると思うので、体系化、カリキュラムを作るガイドラインといったものを作る段階に来ているのかなという風に感じる。
・先程申し上げた、地域、縦との繋がり、横とのつながりを幼小一貫のような視点で考えていくことが良いのかなと感じた。

（難波市長）
・今の点で、先程ご説明いただいた資料４ページで、フェーズ３とフェーズ４が 16%と２%となる。例えば、こういうところはこんな風にやってるという事例はありますか。

（こども未来局）
・学校法人によっては小学校から高校までの長いスパンで一貫した教育を重ねている法人がある。そういったところは既に幼児期から高校を見据えた形で教育を進めており、どんどんこういった教育を継続した教育を進めているという状況にある。

（難波市長）
・もう一つ質問があった、地域との関係で、10 年位前からやっているが未だに体系化されていないというのは何か理由はあるか。

（教育局）
・交流を行うという点では、公立小学校ですと、学校区内にある保育施設あるいは就学前施設とは出来るが、小学校に進学するこども達というのは、保護者が働いている近くの就学前施設に行ったりしている場合もあり、小学校区内にある公立のこども園とは交流が進んでいるというのが現状。

（松村委員）
・連携というのは、こどもに対してどういうふうな指導をしていくのかだと思う。もともと教育施設というのは、こどもをどういう風に繋げて育てていくのかを具現化するためのものだと感じる。
・20 年位前の話だが、全国の校長、理事長の会議があり、その時に披露された新潟県長岡市の山田太郎君の話が忘れられない。長岡高校へ入学した山田太郎君の一年生の担任になった清水先生が、他の生徒のことは名字で呼ぶのに対して自分のことだけは太郎君と呼んだ。その時、山田太郎君はなんで自分のことだけ名前で呼ぶのか疑問に思ったが、卒業するまでそのままだった。その後、清水先生が病気で入院された時に病院にお見舞いに行って、「こんな時で失礼ですけど、なんで先生方は、山田ではなく太郎と呼ぶのですか」と質問した。清水先生は、「そうか説明してなかったな。気にしてたのか悪かったな。君は小学校の時に作文を書いたね。発話障がいのあるお父さん、お母さんに一度でいいから太郎と呼んでほしいと。その小学校の作文が中高とあがってきて、入試選考委員会でその作文をみた先生方が各々考えて、太郎と呼んだんでしょう。」と答えた。先生の見舞いに病院に行ったにも関わらず、太郎は大泣きした。
・僕はその話を聞いたときに、やっぱり人は人の想いをどう繋げていくかが大切だと思った。今の組織として何をどうしていくかということの中に、ベースとして人への想いが繋がってますかということを、ポイントとして考えなければいけない。組織としてどうやって人の想いを繋げるかって討論をしなきゃいけないが、こどもの想いをどう繋げていくか、こ

どものちょっとした変化などに目がいくということをポイントに考えてほしい。

（難波市長）
・非常に大事なポイントだと思う。その一方で、行政だとそういう想いがなかなか繋がらないこともある。
・例えば五歳児検診というところで問題があった時に、小学校に繋ごうと思っても強制力がない。だからああそうですかみたいな感じで、淡々とやってしまうというのは、行政にありがちなところで、そこをどうするのか。やはり心の問題、あるいは想いをどう繋げて、どう持つのかというのは非常に大事な視点だと思う。まさに行政の欠けている部分についてご指摘をいただいたと感じる。

（永松委員）
・頂いた資料の中で、５ページ目（２）③の園児指導要録の引き継ぎがあるが、これは書面的な申し送りがメインで、かつ、それにはこどもの良い面が中心に記載されているので発達課題はあまり分からないと。
・小学校に行くと昔ながらに何十年も同じように先生に向かって前を見て並んでいる。これが学校教育では当たり前になっている中で、この良い面悪い面を踏まえると、皆同じ方向で先生に向かっているという仕組み自体が今の時代に合っていないかもしれないというところも踏まえて、発達課題はきちんと申し送りした方が良いと思う。
・このまま幼保小を繋げましょうとなった時に、下手すると年長さんの授業の中で小学校に行くとこういう授業をやるんだよみたいなお試し授業みたいなことをやりかねない。そうではなく、小学校に行ったら、一歩ステップアップして大人になるんだっていうことをきちんと未就学児に教える場であるべきだと思う。
・勉強面での繋ぎではなく、心の部分の繋ぎ、引き継ぎをしっかりしてほしい。

（黒川委員）
・小中学校義務教育は素晴らしい制度だと思う。日本にいるこども達が必ず学校というゲートをくぐるということは、そこで全ての子を必ずキャッチすることができるという素晴らしい仕組み。
・６歳から 15 歳まで、義務教育の中でその子の人生が終わるわけではないので、学校が一つの通過点となった時に、そこでできることというのが学校だけではなく、様々な機関と連携することで、その子の力を伸ばしたり、困っていることを解決したりできるというとても大きな箱。
・今までは学校とは教育する場だというところに目的が絞られてしまっていたが、社会が変化している中で学校の役割というのは、もっと柔軟になっていくっていうのがとても重要。
・幼保小接続に始まり、義務教育ではないけれども日本のこども達の 99%が高校に行く時代の中で、じゃあその後はどうなっているのかっていうところを含めて、学校というものが様々な役割を担っていく時代だと思う。ただ、学校がそれを全てやるというのは難しいことなので、学校が各機関と連携することで、いかにそれを事実化させていくのかというのが問われている。
・小学校と幼児期のこども達を繋げていくということはとても大事だが、小学校就学前のこども達を受け持っている保育園、幼稚園の先生方の教育の目的というものと、学校の目的というのは大きく違うと思う。それはこどもの発達段階に応じて変化していくものなので、学校に入ってから困らないようにする教育ではなく、学校はこういう場で何がそこで求められるのかということをこどもが知っていく中で、自分にとってどんな困りごとが生じるのかや、学校というものが、自分の今までやってきたものと何が違ってくるのかという意識付けが大事。
・学校に行って困らないように幼稚園や保育園でこどもを教育するというのは、根本が違ってしまうのかなと思う。連携するという意味でも、そこの連携ではなくて、普通に小学校

ではこども主体で伸び伸び生活が出来、自分であることを大事にしてもらえる感覚だったり、自己肯定感を育んでいけるような自由な教育をしてほしい。
・小学校に入ったら、自分と周りの違いという意識が生じてくる。その中でどういう風に生きていくのかということの学びを強化していけるような場であってほしい為、学校の先生と幼児教育に携わる先生の意識の違いや、実際の役割の違いをもっと共有していけると、連携に繋がっていくと思う。

（中村教育長）
・たくさんの課題が見えてきている。幼稚園ではどんな学びをということで、こども達は日々の生活の中で遊びを通して、遊びから学びに繋げるという環境があるということを伺っている。そのこども達に用意されている、様々な遊びの道具とかツールとかを見て、こどもがそこからどれを選んだかというところを周りにいる先生が見て、そこからさらにその子がその遊びから深く学んでいけるように、次の教材や教具を用意していくという環境があるということも伺っている。
・そういった学びをしてきたこども達が就学して、黒板や先生の方に向かって座って、離席はダメだよという環境に入っても、当然ながら対応出来ない。
・こども達はこれまでの教育において、顕在化していなかったかもしれないが、社会のあり方や保護者の価値観が変化し、家庭での過ごし方も変わってくる中、そういうことに合わせるという言葉はあまり使いたくないが、そこから不登校が生まれてしまっているのかと感じる。
・学校現場や、日本のシステム、様々な学びの環境システムにこども達が合わなくなってきている。だから、大人側が変わっていかなければならない。資料の中に静岡市内の幼保小連携ということで、幼稚園では遊びの中で学びを作っているので、遊び道具を小学校にも用意し、一時間目の初めに時間を設けて遊びから入れば、１時間目の後半と２時間目で、こども達が落ち着いて授業に向かえるというような実績も出ている。そういったものをしっかりと効果検証しながら、深めていくしかないと感じる。
・学びの改革、更なる充実というところを、どう図っていくかっていうことが根本的に、必要かと思う。先生方、こども達は一人一人違うし、学び方も違う。個に応じた、個別最適な学びで、そこから協同的な学びを繋げていくというところで理念を語るわけなんですが、先生方もこども達に対する責任感というのが強くて、学びを変えるというところに、抵抗感を持つ教員もいる中で、そこを丁寧に伝えながら、具体的に進めていきたい。
・そういう意味では学びの改革という意味で、今日の不登校と幼保小の接続は深く繋がっていると考えるので、しっかり認識した上で接続へ繋げていきたい。

（難波市長）
・幼保小の接続の問題はここまでとして、最初の不登校の問題と幼保小接続の全体を含めてご意見をいただきたい。

（松村委員）
・不登校のこどもにどう対応するのかという問題と共に、学校には来ているが、自分の好きなことしかやらないという子が出てくる。それはその子の持っている特性だから、それを伸ばしてやればいいと言う意見もある。
・具体例で先日、両生類を研究している 34 歳の研究生に会った。話を聞いていると、ものすごく面白く、その両生類の研究の中に哲学が感じられる。少しその彼の研究を手助けしてあげようと思い、人脈を広めてあげようと思い、プライベートでやってる月に１回様々な分野の人が 30 人程集まる勉強会に招待した。しかし、約束の時間になっても来ない為、本人に電話しても出ない。15 分くらいしてから、ラインで「失念してました」と一言返信がきた。失念していたのはしょうがないとして、来るのか来ないのかどっちか確認すると、遅くなったのでいけませんと返ってきた。

・研究者としては非常に面白く、哲学者として優秀だと思うが社会人としてどうなのか。こういう事情で待ってるよってことをあらかじめ説明してあって、時間も場所も設定したのに、それに対する想いが全くない。「失念してました」の一行だけ。これは社会人としてどうなんだと。自分の殻に閉じこもってずっとくると、社会性が育ってこない。研究者として研究することは悪いことじゃない。ところが社会人としたら問題。そこをどう教えるかということもあるということを、教員は考えておかなければいけないと強く思った。
・性格的に感情的な部分がこっちにもあるもんだから、こちらも「お前とは縁がなかったね」という一行で終わらせた。そこに来ていた若い先生が、「今日はいい勉強になりました。先生って怖いなって思いました。」それが結論で終わった。ダメだっていう人を作らないようにするっていうのも教育の現場だし、社会としての役割かなと強く思った。

（難波市長）
・不登校が与える影響というところで、学びだけじゃなくて、社会性が重要。学びというのは通常でいう学び、その社会性みたいな学びが不登校になると失われるので、そこにそういう問題もあるのかと。他にいかがか。

（黒川委員）
・今の話に繋がると思うが、私自身が不登校のこども達の支援の仕事をしている。なかなか学校に行けなくなった時に、それ以外の居場所というのを探す力のある保護者や本人であれば、いろんな居場所に繋がったり、行政の方で提供している様々なサービスに繋がれるが、そうでないこども達が比較的家に閉じこもりがちになり、社会からどんどん離れていってしまう印象を受けている。
・先生方というのは非常に真面目で、学校に戻ってきてほしいという想いが、どこまでもついてまわっている。それは学校というものを信じて、運営されている。そこで働かれている先生方の素晴らしいところであると同時に、学校で苦しい思いをして過ごしているということは、学校以外に一度身を置かせてあげるということも、一つの学校の役割ではないかと感じる。
・ではどういったところがあるのかということを、学校はすごく平等性を追求する場所だと思うので、行政的なところ以外の様々な資源というのを先生達がご存知なかったり、ご存知であっても、なかなか個別のところを紹介することは難しいというところで積極的に動けない場合が多い。選択の自由はこども達にあるので、情報を様々な形で提供してあげるというのは、学校の役割だと感じた。
・資料の中で、７ページに出席日数のことが書かれているが、実際学校以外の場所学んでいるこどもはたくさんいると思うが、このうちその学びを在籍する学校の出席日数としてカウントされているこどもが、実際は 157 名しかいないというところで、この中学生のうちの 1/3 ぐらいは私が関わっているこども達かなと思う。出席日数にするしないというのは大きな問題ではないと思っており、本人が学校外のところで、自分なりに居場所を見つけたり、取り組みたいと思っていることをいかに学校が支えてあげるかということもある種の支援の形だと思う。学校に行っていないということに、こども達は罪悪感を感じていて、自分は行っていない、みんなは行っているということが常に付きまとっている。今は学校に行けていないけれど、他に頑張っていることがあるんだということを認めてもらう経験というのは本当に大きいと感じる。実際に出席日数にするしないというのは、やはり行政が定める仕組みの中で勉強をしていないとダメだよとか、一人で何かに取り組んでいるだけではダメだよと言われている例というのも聞いたことがあり、出席日数って単純に彼らが頑張っているよっていうことを認めているという形で捉えられると、こども達にとっても、自己肯定感に繋がり、学校と出席日数にカウントしている施設との交流が生まれるので、一人一人の様子も分かり、こどもと学校が繋がるきっかけになるというのを私はすごく痛感している。
・仕組みとはすごく大事で、決まり事があるのはわかるが、学校以外での頑張りをいかに認

めてあげるか、その後の社会に出た時に、社会との繋がり、この中で自分は何をしなければいけないか、それを顧みる為の原動力になると思い、教育委員会側でできることというのがあると感じる。

（難波市長）
・事務局で、今の仕組みあるいは決まり事のところで、出席扱いするしないかっていう判断はどういう風になっているか。

（教育局）
・出席とするか否かについては、文部科学省の方から、「不登校児童生徒への支援の在り方について」ということで出されている。その中に出席にする場合の要件等があり、まず保護者と学校との間に十分な連携協力関係が保たれていることなど、４つの要件がありますが、いずれもきっちりこうすれば出席ですよとか欠席ですよっていう明確なラインはない。
・不登校のこども達の実態も様々というところが、そのような形になっている理由かと思うが、最終的には校長先生が判断するということになってるので、どうしたらいいかなという風に悩んでいる校長先生方もいる現状。

（難波市長）
・そうすると黒川委員が言われたように、そのあたりを積極的に運用する要素はありそう。きっちりこれしかないと決められているわけではないので、校長先生の判断ということもあるだろうが、裁量はあり、自己肯定感を持ってもらうような運用とする余地はある。

（教育局）
・今話したような現状もあり、ある程度出席扱いと出来るように、何かしらを学校に示していくことは検討している。今はまだ文部科学省の通知を伝達しているに留まっているので、静岡市としての取り組みを作っていきたいと考えている。

（井上委員）
・本日は不登校と幼保小の接続について議論させて頂いたが、改めて学校の学びを変革していくという、静岡市だけでなく日本全体でそんなタイミングにきていると感じた。最初に校内サポートルーム、居場所の話をしたが、普段中高生と接することが多く、その子達に聞くと、口を揃えて自分たちの居場所が欲しいと言う。この居場所というのは、いわゆる第３の居場所で、図書館はあるけどこども達で集まれるような場所がなくて、校内サポートルームは学校内だが、学校内で自分達が集まれるような場所があったらいいという話を頻度多く聞く。静岡市内では、未就園児のこどもの遊び場がすごく増えてきており、素晴らしいと思う。あとはユース世代が行ける場所もあると、こども達が社会と繋がることもでき、そこで社会や人と関わって、静岡への愛着を育むことができるかもしれない。今日は不登校対策という視点で話をしたが、そういった視点でこども達の居場所、こども達が安心安全に過ごせる場所が必要。今も静岡市の方で整えていただいているかとは思うが、例えば教育支援センターの利用者が通所で 30 人。おそらくかなりマンパワーを使って運営していると思うので、機能を拡充するのか、作り直していくのかというところはまた議論が必要かと思う。不登校の未然防止、予防支援という視点でも良いのではないかと思う。

（難波市長）
・関連してということで、現在中学校では部活動を中学校単位でやっているが、２年後からは地域クラブという形になる。平日も土日も含めて地域クラブでやるということになるので、学校から離れた形になり、これも一つの居場所になるのではないか。学校には行かないけど、地域クラブは行けるみたいなこともひょっとすると出てくるかもしれない。そのクラブもいわゆる本気でやるサッカーだとか野球じゃなくて、いわゆる習い事的なものも

入ってくるので、例えば書道だとかそういうものも地域クラブの中でやるようになってくるので、一つの居場所になるかもしれない。先程地域との関わりの重要な話もありましたので。
・では教育長に総括をいただきたい。

（中村教育長）
・これからやっていかなければならないことが数多くあるなということを実感している。今日の話の中で特に学校のあり方をもう１回考えていかなければいけないと感じた。
・教育の目的という話もあったが、本当にこれからの時代を生きていくこども達にとって、何を目的にしたらいいのか、いわゆる今まで言われてきた学力だけではないということ。そして、社会を力強く生きていくこども達を育む為に、幼保小、そして中学校高校とどういう学びの連携としていくか。今までは進学の時点で学校での教育に区切りがありましたけれど、こども達から見れば、幼保から先の学校段階を合わせて一つの連続した学びとなる。
・将来、静岡にいる人、日本にいる人、世界に出ていく人など、いろんな選択肢があると思うが、そのこども達にどんな力を学校教育で身に付けていくかということを、もう一度議論しなければならないと思う。
・一つ言えるのは、今までのこども感。言い方は悪いですが、こどもは「教えないといけない存在」である。という概念は、変えていかなければいけないし、先生のあり方もこどもの学びを繋ぐファシリテーターという考え方を持っていかなければならない。そして、指導のあり方についても、どんな学びを環境として整えていくのか、そこは選択肢があって、自己決定出来るそういった学びの環境が必要になってくると思う。授業だけではなく、学校全ての教育活動の中で、例えば生徒会や児童会活動や、民間で行われる教室であるとか、そこにこども達が参画できるような環境を整えることで、より自分を出せる環境を作っていくということが大事だと感じた。
・様々な考えを持つ方がいるから、これからも丁寧に対話を持ちながら進めていきたい。今後も教育委員の皆様、そして市長部局の皆様にご協力いただきたい。

（難波市長）
・会議以外でも、様々な形でご意見を伺うこともある。松村委員からお話しいただいたが、自分が小さな頃は価値観が非常に狭く、多様性も少なかった。レジリエンスという話もあったが、同じ方向を向いていて、みんなタフな時代だったなと感じる。
・今はそういう時代でなくて、価値観は多様で、レジリエンスというところは弱くなって、タフではなくなっている。そういう時代で、新しい教育、あるいは学びの輪を作っていかないといけないため、今後も色々ご意見をいただければと思う。

３　閉会
（事務局連絡）
・次回の会議は 12 月頃を予定している。開催日時については決まり次第お知らせする。